



登録稲門会 検索

現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

北京稲門会は、北京在住の日本人卒業生のみならず、中国留学中の現役学生、さらに早稲田に留学し北京に戻ってきている多くの中国人の方にも入会いただき、相互の親睦を深め、一緒に活動しているのが最大の特徴です。

これは早稲田大学が創立間もない1800年代から中国からの留学生を受け入れているためだと思います。現在ではその数2,000人をはるかに超えていると伺っています。また、現役学生も北京大学などに多数留学しています。

中国人留学生からは、建国の指導者や日中国

交正常化、友好促進に貢献した多数の人材を輩出しており、日本の指導者の中にも河野洋平元衆議院議長ほか日中友好に力を尽くしている多数の先輩がおり、早稲田は北京で抜群の存在感を誇っています。

今年は日中国交正常化45周年の節目の年に当たります。北京稲門会が日本と中国の草の根交流の場となり、日中友好促進の一助となるのであれば、これに勝る喜びはありません。

金森 健(1980年法学)

会員からのメッセージ

この2年半、米中二大国のパワーバランスにシフトしていく様子を肌で感じることができ、また、金融・経済の分野で中国が大きな存在感を示していく過程をつぶさに見ることができ、北京駐在生活は刺激にあふれています。生活面においても、シェアリングサイクルの急速な普及など、サービスが生活の小さな不便をものすこい勢いで解消し、一気に便利な世の中をつくっていくのに驚きを隠せません。世代を超えて、百戦錬磨の諸先輩方と多岐にわたる話題で語らえるのは、早大アラムナイの醍醐味です。

松本 治(2010年法学)

私は現在、北京大学にダブルディグリープログラムで留学しています。北京大学の学生は皆勉強に対する意欲が高く、自分自身も日々努力をしなければならぬと感じさせられます。私は北京に来て間もないですが、すでに

多くの方たちの優しさに触れました。中でも北京稲門会は学生と社会の方が交流することができる貴重な環境です。勉強のみならず、北京稲門会でのつながりも大切に、今後の留学生生活をより充実したものにしたいです。

岡本紀奎(政治経済学部2年)

2015年春に北京へ赴任し、まだ北京のことも稲門会のこともよく分からないときに、縁あって幹事長の職に招かれて早くも2年が経過しました。まだまだ至らぬ私をいつも温かく見守り、ご支援くださっている稲門会関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。当会の財産は何といっても会員の皆さま、「人」です。特に北京の寒い冬に稲門会の集いは、まさに暖炉のようにほっこりと体を温め、包み込んでくれます。この雰囲気を保ちつつ、進化し続ける開かれた北京稲門会へ、皆さま、ぜひ、集まり散じて日中友好・早稲田ブランドの発展に貢献しましょう！

谷田 仁(1995年理工)

北京に来て半年後に北京稲門会への入会を決め、2回の定例会を経て幹事業務をさせてもらっています。稲門会では、さまざまなイベントに参加、企画をしています。北京稲門会は、家のような温かさ、包容力があり、早稲田精神の下、中国と日本、異なる年代と職業の校友たちがとても仲良くつながっています。世界に約70の稲門会があることを知り、旅行愛好家の私としては、各地の稲門会にぜひとも訪れてみたいと思っています。稲門会で北京を感じ、稲門会で世界を感じています。

李 汶瑾(2013年アジア研修)

早稲田大学と中国の関係は、1899年の国費留学生受け入れまでさかのぼります。以来、中国近現代史の各界のエリートが早稲田に留学しています。

北京稲門会は、日本人駐在員、日本からの留学生、中国人卒業生を中心に、稲穂の香りを囲む自



主的な組織として、改革開放政策が始まって間もない1980年代から、北京の地で活動を開始しました。

これまでの会員数が600人を超える歴史ある北京稲門会は、その3分の1が中国人会員です。また、早稲田大学が2005年に北京大学内に事務所を設置し、北京大学とダブルディグリー・TSA制度を始めて以降、多くの現役留学生が稲門会活動に参加しています。

定期会合は2カ月に1度開催し、北京三田会とは、春・秋のゴルフ早慶戦と暑気払い、新年会などのイベントを通して親睦を深めています。そのほか、近年は慶應、英国オックスフォード、ケンブリッジ両大学、韓国延世大学との合同同窓会など、活動も活発になっています。帰国した会員による日本支部も、東京・大阪・名古屋の各地で活動しています。

松本 治(2010年法学)

早慶合同暑気払い交流会の1コマ。若手からベテランまで一体感があります

北京の魅力

外交・政治の都市と思われがちの北京ですが、スマートフォンを活用した消費市場拡大や、国貿エリアを中心とする超高層ビル開発など、経済成長の勢いはまだまだ止まりません。近年は、中関村エリアを中心に、若手起業家による多くのサービス・イノベーションが、ここ北京から生まれています。

天安門、故宮、頤和園などの史跡、胡同、四号院などの伝統文化や建築、種類が豊富な中華料理、人懐こく、子どもに優しい人々。今まで見えづらかった北京の側面の一つ一つが、シェアリングサイクルなどの新サービスにより身近になっています。ずっと変わらない伝統文化の上に、新しいサービスの風が吹いている北京は魅力にあふれています。

松本 治(2010年法学)

(上) 300~500メートルのビルが新設予定の国貿エリア
(下) 街で大体見つけられるシェアリングサイクル



北京の地でも、会の最後は校歌斉唱

